

## 讃岐地域における寺院選地

梶 原 義 実

### はじめに

讃岐地域は畿内に近く、瀬戸内の海上交通の要衝でもあることから、瀬戸内海を挟んで隣国の播磨や備前・備中と並んで、古代寺院が数多く造営された地域である。管見の限りでも、現在までに30ヶ所以上、飛鳥～奈良期の寺院跡が確認されている。

本稿ではこれら諸寺について、筆者がこれまで実践してきたのと同様、地理的条件や周辺遺跡等との関係から、寺院選地の傾向性を復原し、ひいてはこの地域における寺院の造営背景の一端に迫りたい。

### 1. 東讃地域における古代寺院

本稿では、大内郡・寒川郡・三木郡・山田郡・香川郡を東讃地域として扱う。現在までに大内郡1寺、寒川郡4寺、三木郡3寺、山田郡4寺、香川郡4寺が確認されている。

白鳥廃寺は大内郡に所在し、湊川下流西岸谷筋の丘陵裾部に位置する。発掘調査によって東に塔、西に金堂、およびその北方に建物基壇が確認されており、法起寺式伽藍配置が想定できる。創建瓦は白鳳末期と推定される複弁蓮華文軒丸瓦と重弧文軒平瓦だが、その出土はわずかで、その後、藤原宮式偏行唐草文軒平瓦や平城宮式均整唐草文軒平瓦および、これらとセットとなる花卉が角張った特徴的な複弁八弁蓮華文軒丸瓦での大規模な整備、修造がおこなわれている。

下り松廃寺は寒川郡に所在し、南海道沿い、松本駅家が推定されるあたりの平野部に位置している。伽藍の詳細や、心礎など寺院を示す遺構はみつかっていない。宝寿寺と同文の素弁六弁蓮華文軒丸瓦が文様的に最先行で、その後藤原宮式軒丸瓦や、平城6304または6316型式と同文の複弁八弁蓮華文軒丸瓦、均整唐草文軒平瓦などを採用している。

極楽寺跡は寒川郡に所在し、下り松廃寺の西方、南海道沿いに張り出す低台地の南端付近に位置している。明治期には瑞花双鳳八花鏡などが発見されており、昭和44年の発掘調査により講堂と塔の基壇が南北に並んで検出され、四天王寺式伽藍配置が想定されている。創建瓦は鋸歯文縁細弁十二弁蓮華文軒丸瓦と重弧文軒平瓦のセットであり、讃岐一円に広く分布する川原寺式軒丸瓦が細弁化したものの流れを引くとされている（川畑 1996 など）。それに続く瓦と



図1 東讃地域における古代寺院・瓦出土遺跡および関連諸遺跡 (1:150,000)

- 凡例
- |                              |                   |
|------------------------------|-------------------|
| 卍: 飛鳥時代頃創建の寺院                | 卍: 奈良時代頃創建の寺院     |
| 卍: 飛鳥時代頃創建で、奈良・平安時代の修造瓦をもつ寺院 |                   |
| □: 飛鳥時代頃の官衙系遺跡               | ■: 奈良・平安時代頃の官衙系遺跡 |
| □: 飛鳥～奈良・平安時代の官衙系遺跡          |                   |
| △: 飛鳥時代頃の生産遺跡                | ▲: 奈良・平安時代頃の生産遺跡  |
| △: 飛鳥～奈良・平安時代の生産遺跡           |                   |
| ●: 前方後円墳                     | ●: 群集墳 (10基以上)    |
| ■: 条理地割の残存する地域               |                   |

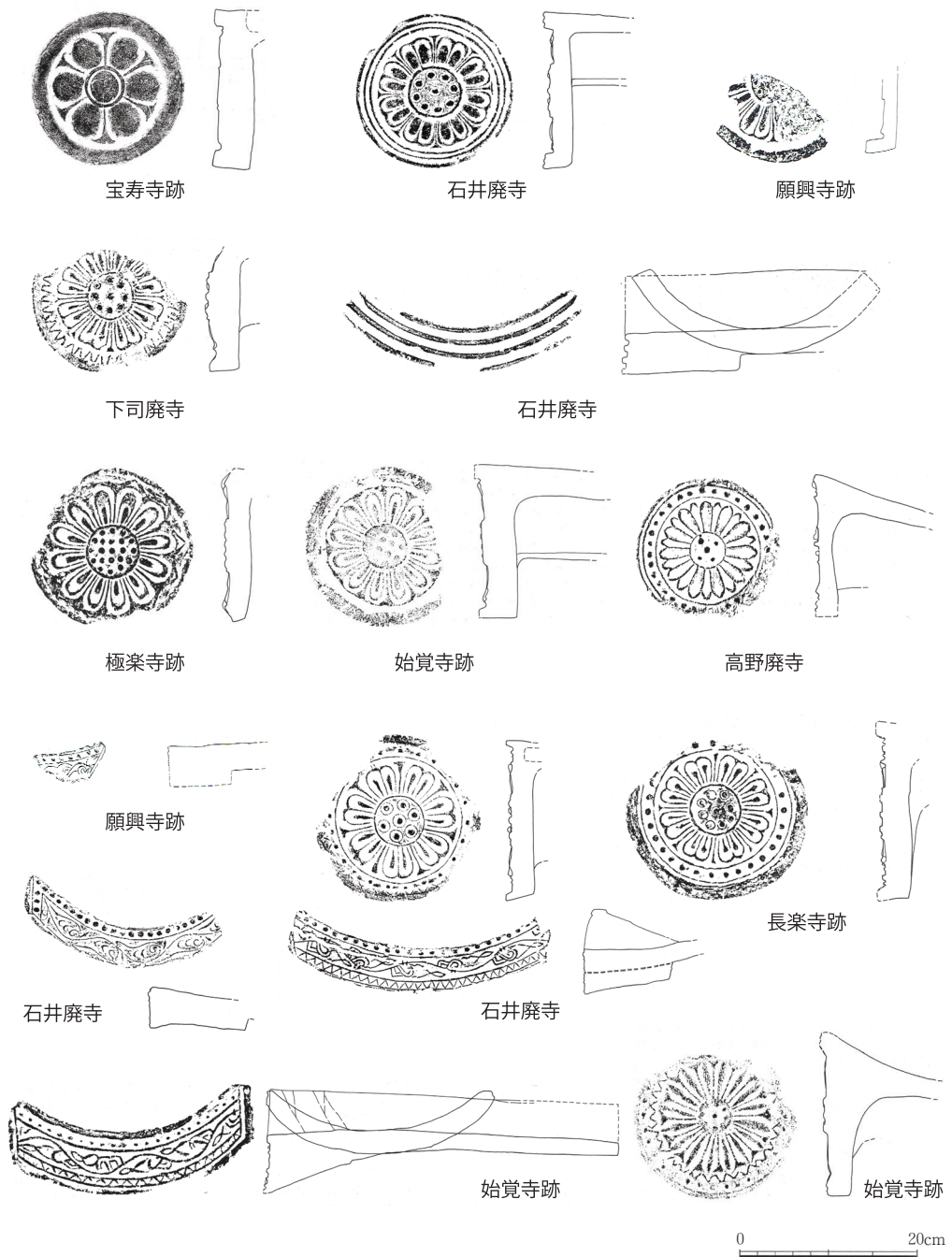


図2 東讃地域の軒瓦 (1:8)



して、外区珠文帯をもつ剣菱型花卉の単弁八弁蓮華文軒丸瓦と変形偏行唐草文軒平瓦なども確認されている。

石井廃寺は寒川郡に所在し、雨滝山塊から西に派生した丘陵上のやや奥まったところに位置している。塔心礎が残るが、伽藍配置等は不明である。石川寺式の重圈文縁複弁八弁蓮華文軒丸瓦と重弧文軒平瓦を創建瓦とし、その後藤原宮式の影響が濃い複弁七弁蓮華文軒丸瓦と偏行唐草文軒平瓦のセットなどを採用している。偏行唐草文軒平瓦は開法寺や善通寺などで同文瓦がみられる、中讃の系譜を引くものである。

願興寺跡は寒川郡に所在し、高松平野北東方の丘陵端部に位置している。発掘調査はおこなわれておらず、詳細は不明である。出土瓦は川原寺式の複弁八弁蓮華文軒丸瓦と重弧文軒平瓦を初現とし、藤原宮6647E 型式と同範とされる(山崎 1995) 偏行唐草文軒平瓦、細弁十五弁蓮華文軒丸瓦、変形均整唐草文軒平瓦などが確認されている。

上高岡廃寺は三木郡に所在し、高松平野南端の丘陵裾の平野部に位置している。発掘調査はおこなわれておらず詳細は不明。極楽寺跡などと同範の細弁十二弁蓮華文軒丸瓦や重弧文軒平瓦などが確認されている。

長楽寺廃寺は三木郡に所在し、上高岡廃寺の西方、高松平野南部の丘陵部に位置する。伽藍の詳細は不明だが、藤原宮の6278E および6646型式に近い(坪之内 1982)、藤原宮式軒瓦の出土が確認されている。軒平瓦は石井廃寺と同範である(山崎 1995)。

始覚寺跡は三木郡に所在し、高松平野南東に延びる内陸平野の入口付近北側の丘陵上に位置している。心礎が残存しており、発掘調査で回廊と思われる遺構と平窯が確認されている。細弁系の軒丸瓦が4 型式および、石井廃寺などにもみられる変形偏行唐草文軒平瓦の退化型式、上外区に線鋸齒文をもつ均整唐草文軒平瓦が出土している。

宝寿寺跡は山田郡に所在し、高松平野東縁の丘陵裾部に位置している。土壇および礎石が残っており、塔跡と推定されている。また寺域南端の前田東・中村遺跡が調査され、宝寿寺跡のものと思われる瓦が出土している。出土瓦は百済系とされる素弁六弁および七弁蓮華文軒丸瓦がもっとも古く、その後、始覚寺と同範の細弁十二弁蓮華文軒丸瓦および外区珠文帯をもつ細弁十四弁・十七弁蓮華文軒丸瓦、藤原宮式と考えられる複弁八弁蓮華文軒丸瓦などが確認されている。軒平瓦はいまのところ、重弧文軒平瓦のみである。

山下廃寺は山田郡に所在し、宝寿寺跡の北方、高松平野を望む丘陵緩斜面上に位置している。発掘調査はおこなわれておらず、瓦窯の可能性も指摘されている(川畑 1996)。出土瓦は、高野廃寺や始覚寺跡、宝寿寺跡など近接諸寺で出土しているものと同文の細弁系軒瓦が中心である。

下司廃寺は山田郡に所在し、春日川上流域の小盆地内、春日川の支流である朝倉川左岸の河岸段丘上に位置している。発掘調査はおこなわれていないが、土壇および礎石が残存しており、塔跡と推定されている。出土瓦は川原寺式の複弁八弁蓮華文軒丸瓦と重弧文軒平瓦のセッ



トおよび、平安期に降るとされる瓦も確認されている。

高野廃寺は山田郡に所在し、高松平野の南部、南から南海道沿いに延びてくる丘陵端部に位置しており、寺域の北側には推定南海道が通り、三谿駅家もこの近辺に推定されている。発掘調査はおこなわれておらず、伽藍の詳細等は不明である。出土瓦は重弧文軒平瓦がもっとも古いが、多くを占めるのは、外区珠文帯を巡らし、花卉と間弁が重弁状に重なる細弁十一弁・十弁・九弁蓮華文軒丸瓦と、変形偏行唐草文軒平瓦である。

坂田廃寺は香川郡に所在し、高松平野北部の独立丘陵である石清尾山塊の東麓谷筋奥に位置している。石清尾山塊には、古墳時代前期の積石塚として著名な岩清尾山古墳群や後期古墳群も多く存在している。金銅仏や基壇、礎石の出土から、寺院と知れる。出土瓦は川原寺式の外縁が\*印文となる複弁八弁蓮華文軒丸瓦などと重弧文軒平瓦が創建期の瓦であり、他に平安期とされる単弁系瓦なども出土している。

勝賀廃寺は香川郡に所在し、勝賀山の北方尾根筋端部に位置しており、瀬戸内海が一望できる立地である。礎石は残るが、寺院を示す明確な遺構は確認されていない。出土瓦は川原寺式の系譜を引く線鋸歯文縁複弁八弁蓮華文軒丸瓦がもっとも古く、その後藤原宮式のセットが採用され、平安期の瓦もみられる。

百相廃寺は香川郡に所在し、香東川の東岸、独立丘陵である船山の山麓の沖積低地上に位置している。字神宮寺の地名からは、田村神社との関係も考えられよう。現船岡神社の境内付近にあたり、礎石のみ残存するとされる。出土瓦は藤原宮式偏行唐草文軒平瓦および、備中地域に分布する備中式軒丸瓦に類似した、外区に鋸歯文と珠文帯を巡らせる素弁蓮華文軒丸瓦が確認され、平安期の瓦もみられる。

田村神宮寺は香川郡に所在し、田村神社境内に位置する。田村神社は香東川中流右岸の平野部、河川が分流するいわゆる「川合の地」に位置している。国分寺系瓦が出土しているとされ、奈良時代の創建とされる(安藤 1988)。

## 2. 中讃地域における寺院選地

本稿では、阿野郡・鵜足郡・那珂郡・多度郡を中讃地域として扱う。現在までに阿野郡 5 寺、鵜足郡 1 寺、那珂郡 3 寺、多度郡 2 寺が確認されている。

開法寺跡は阿野郡に所在し、綾川が下流域において扇状地を形成していく扇央部付近の左岸丘陵裾部に位置している。寺院の南方には南海道が通っており、綾川と南海道の交点であるこの地には、讃岐国府が置かれており、地理的にも行政的にも古代讃岐国の中心であったことがわかる。『菅家文草』にも、国府の西にあったとして、その存在が記録されている寺院である。塔基壇等の発掘調査がおこなわれており、法起寺式伽藍配置が想定されている。出土瓦のうち最古のものは、弁間に珠文を配し、いわゆる高句麗様式の特徴をもつ素弁十弁蓮華文軒丸瓦で

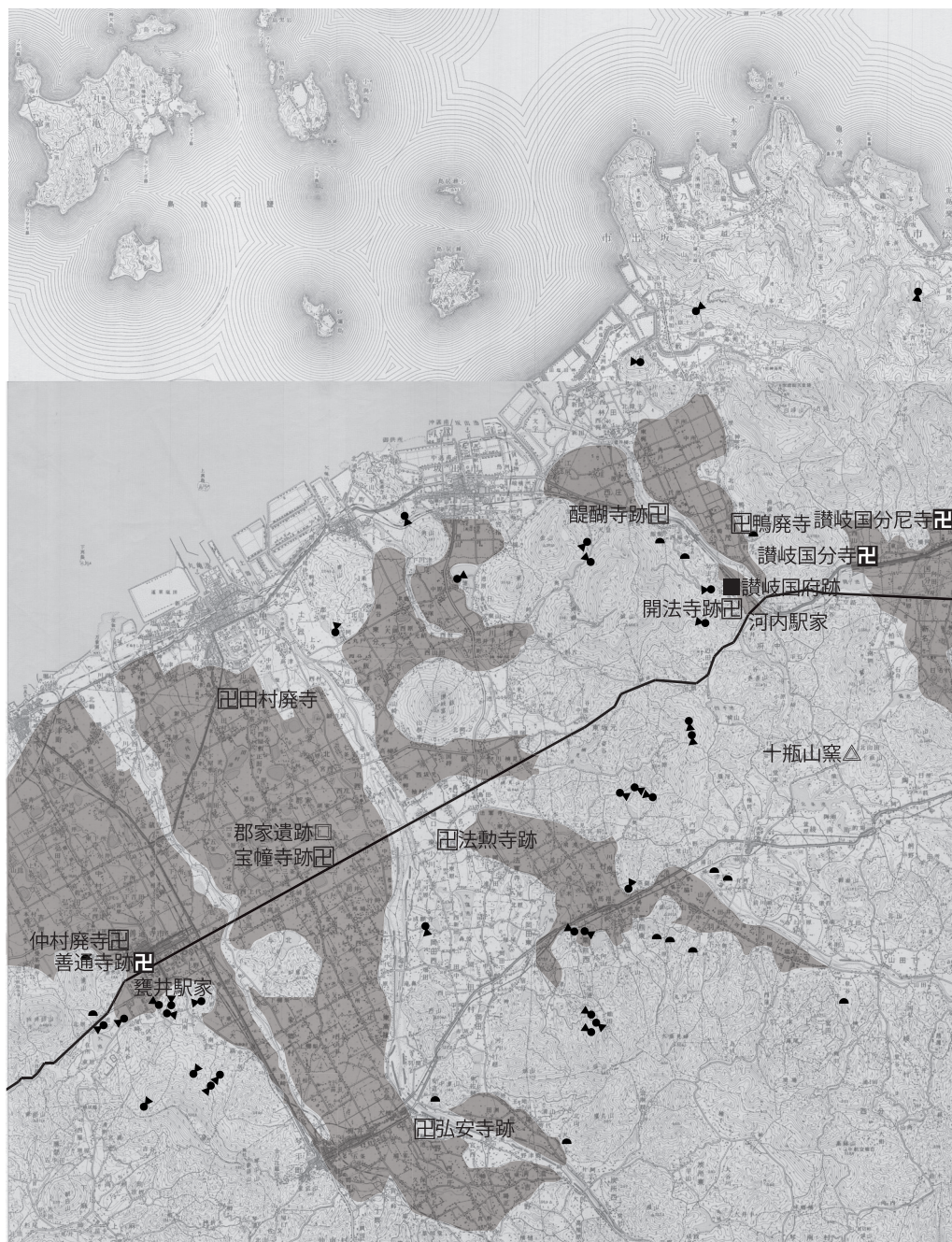


図3 中讃地域における古代寺院・瓦出土遺跡および関連諸遺跡 (1:150,000)



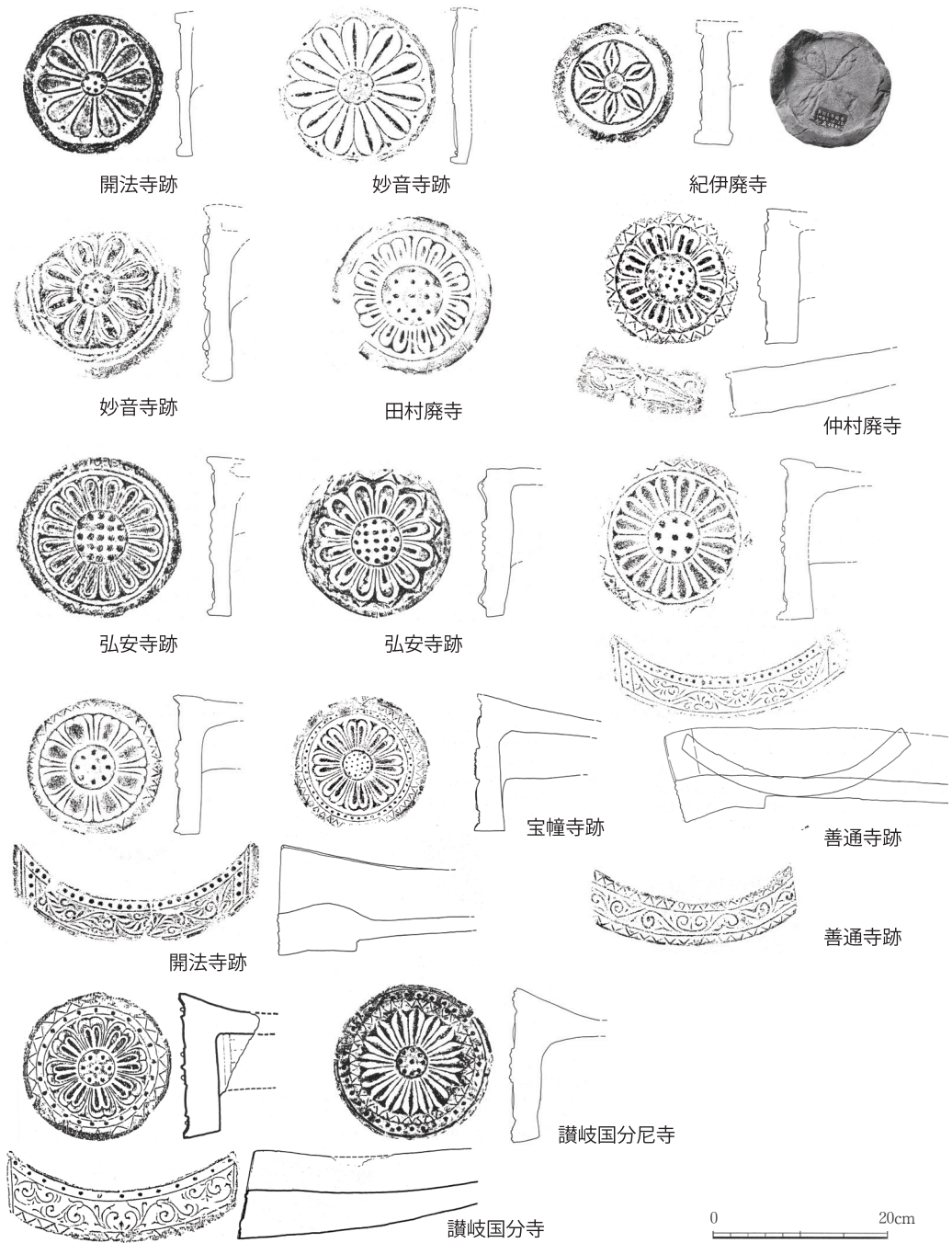


図4 中讃・西讃地域の軒瓦 (1:8)



あり、7世紀中葉～第3四半期頃としてよいであろう。それ以後の白鳳期の代表的な瓦としては、川原寺式の外縁を\*印文に置き換えた複弁蓮華文軒丸瓦や、おなじく川原寺式の退化形式とみられる(蓮本 1993) 弁端に切込をもつ鋸歯文縁素弁八弁蓮華文軒丸瓦と、下外区に鋸歯文帯をもたない藤原宮式偏行唐草文軒平瓦のセットなどがあり、また奈良～平安期に降る瓦も多く確認されている。

鴨廃寺は阿野郡に所在し、綾北平野の東端、烏帽子山麓に位置する。塔心礎が残されている。出土瓦は開法寺跡との同范関係をもつものが多く、\*文縁複弁蓮華文軒丸瓦や弁端切込をもつ鋸歯文縁素弁蓮華文軒丸瓦、藤原宮式偏行唐草文軒平瓦などが確認されており、平安期の瓦もみられる。

醍醐寺跡は阿野郡に所在し、綾川下流域西岸の河川堤防上に位置している。方形の土壇および礎石が残存している。出土瓦は素縁の複弁蓮華文軒丸瓦と、平安期の瓦も出土している。

讃岐国分寺・国分尼寺は阿野郡に所在し、讃岐国府の東方、本津川沿いの平地奥部に位置している。南海道の本道の推定路からはすこし離れているが、国府から国分寺・国分尼寺はほぼ一直線上に位置しており、そこから現高松市街方面へ抜ける支路の存在はじゅうぶんに考えられよう。出土瓦は東大寺式軒平瓦を中心としており、諸国の国分寺と同様8世紀中葉頃の創建とされてきたが、近年、創建年代をやや下げて考える論考も提示されている(渡部 2013)。また国分尼寺では、国分寺ではほとんど出土しない細弁十六弁蓮華文軒丸瓦が多く出土しており、この瓦の系譜は先述の始覚寺跡をはじめ東讃地域に波及する。

法勲寺跡は鵜足郡に所在し、土器川中流域東岸の丘陵裾の沖積低地上に位置している。西側の土器川および北側を通過する南海道とは、それぞれ低丘陵によって遮られ、東の小平野に向けて開けた立地となっている。それより特徴的なのは、寺域の真北方向に、讃岐富士とも呼ばれる飯山を遠望できることである。寺院が神奈備などの山を遠望・遙拝する例は、真南方向に白山を遠望する石川県末松廃寺<sup>1</sup>や、伊勢大神宮寺ともされる三重県逢鹿瀬廃寺<sup>2</sup>、また若狭地

域などでも多く事例が紹介されている(小林 2015)。法隆寺式の伽藍配置が推定されている。出土瓦は川原寺式の系譜を引く素縁複弁八弁蓮華文軒丸瓦等もみられるが、弁間に縦線を配する素弁八弁蓮華文軒丸瓦や、子葉を三本線で示す複線鋸歯文縁単弁蓮華文軒丸瓦など、讃岐国内の他の寺院とは一線を画す特徴的な文様が大部分を占める。平安期の瓦も出土している。



図5 法勲寺跡(手前の高木の右側あたり)と飯山(南から)

宝幢寺跡は那珂郡に所在し、土器川西岸の丸亀平野中央部の沖積低地上に位置している。寺域は南海道に接しており、また付近に郡家の地名が残ることから、那珂郡家に隣接する寺院とされる。法隆寺式の伽藍配置が推定され、塔心礎も残されている。出土瓦は藤原宮式の複弁八弁蓮華文軒丸瓦が中心で、讃岐国分寺と同範の軒丸瓦や、平安期の軒瓦も確認されている。

田村廃寺は那珂郡に所在し、土器川西岸に形成された沖積低地の末端近くに位置している。塔心礎が残されるほか、発掘調査で梵鐘鑄造遺構なども確認されている。出土瓦は川原寺系の素縁複弁八弁蓮華文軒丸瓦や、細弁十六弁蓮華文軒丸瓦と外区鋸歯文をもたない藤原宮式偏行唐草文軒平瓦のセットなどで、平安期の瓦も出土する。

弘安寺跡は那珂郡に所在し、土器川が丘陵から平野部へと流れ出る結節点の沖積低地に位置している。土壇および心礎が残されている。出土瓦は細弁蓮華文軒丸瓦が中心であり、この種の瓦の讃岐における初現形態とされる。奈良期には平城宮の系譜を引く鋸歯文縁の単弁蓮華文軒丸瓦や外区鋸歯文をもつ均整唐草文軒平瓦など使用される。

仲村廃寺は多度郡に所在し、弘田川の中流域左岸の丘陵裾部の沖積低地に位置している。南海道にほど近い立地で、南海道が丸亀平野を横切り丘陵部へと続く入口付近に位置する。出土瓦は法隆寺式軒瓦のセットを初現とし、その後弘安寺と同範の細弁蓮華文や、それに後続する細弁十六弁蓮華文軒丸瓦と、外区鋸歯文をもたない藤原宮式の偏行唐草文軒平瓦のセットを採用する。平安後期の瓦も確認されるが、初期の仲村廃寺は奈良時代までに焼失し、その後隣接する善通寺跡に移建されたものとする見解が提示されている。

善通寺は多度郡に所在し、仲村廃寺にほぼ隣接して位置している。現在の善通寺東院が旧伽藍にあたる。金堂跡や講堂跡の土壇が残り、四天王寺式の伽藍配置が想定されている。出土瓦も古手のものは仲村廃寺とほぼ一致しており、仲村廃寺の移建に伴い持ち込まれたものとされる。移建後の瓦としては、平城宮の系譜を引く複弁八弁蓮華文軒丸瓦や変形唐草文軒平瓦、外区鋸歯文帯をもつ均整唐草文軒平瓦などが使用されている。平安期の瓦も出土している。

### 3. 西讃地域における寺院選地

本稿では、三野郡・刈田郡を西讃地域として扱う。現在までに三野郡2寺、刈田郡3寺が確認されている。

道音寺跡は三野郡に所在し、三豊平野北方に張り出す小丘陵の南裾に位置している。南西方向の沖積低地部に向けて開けた立地をとるが、寺域東方を走る南海道の推定位置にも近い。塔心礎が残存している。出土瓦は法隆寺式および川原寺式の複弁八弁蓮華文軒丸瓦を創建瓦とし、奈良期には善通寺跡などと同範の鋸歯文帯均整唐草文軒平瓦などを使用し、平安期に降る瓦もある。

妙音寺跡は三野郡に所在し、陣山から西に伸びる丘陵端部に位置している。寺域のすぐ西方

に、南海道の推定路が通っている。出土瓦としては、弁間に珠点を配すなど高句麗様式の単弁十一弁蓮華文軒丸瓦が古相を示し、7世紀中葉～第3四半期頃の瓦であろう。それに続き山田寺式の重圏文縁単弁八弁蓮華文軒丸瓦や垂木先・隅木先瓦、川原寺式の系譜を引く素縁複弁八弁蓮華文軒丸瓦などを、奈良期には外区鋸歯文をもつ唐草文軒平瓦を、それぞれ相次いで採用し、平安期の瓦もみられる。

高屋廃寺は刈田郡に所在し、三豊平野の海岸近く、七宝山の形成する丘陵谷間の隘部斜面上に位置している。出土瓦は高句麗様式の系譜を引く有稜素弁蓮華文軒丸瓦と重弧文軒平瓦、奈良期には外区鋸歯文帯の均整唐草文軒平瓦を採用し、平安期の瓦もみられる。

大興寺跡は刈田郡に所在し、三豊平野東方の丘陵斜面上に位置している。出土瓦は高句麗系の素弁蓮華文軒丸瓦などである。

紀伊廃寺は刈田郡に所在し、三豊平野南方、柞田川左岸の河川堤防上に位置している。柞田駅家の推定地にもほど近く、駅家との関連性も想定できる。出土瓦は高句麗様式の系譜を引く単弁蓮華文の瓦群であるが、多くの型式が縦置型一本作りで製作されているのが特徴的である。一本作りの一群を平安期のものとする見解が提示されているが(川畑 1996)、文様および技術系譜からは、7世紀に遡る可能性も考えられよう。筆者は原資料を実見していないので、確言は控える。

#### 4. 讃岐地域における寺院の選地と動向

以上から、讃岐地域における寺院の選地傾向およびその動向について、東讃地域と中讃・西讃地域に分けて、それぞれ復原していく。

##### 東讃地域

この地域でもっとも古手の瓦としては、宝寿寺や下り松廃寺の素弁系軒丸瓦があり、詳細な年代観は難しいが、おおむね7世紀後半としてよいであろう。しかしこの瓦の系譜は他寺と繋がりをもたずに消滅する。

その後に導入されるのが、川原寺式の系譜を引く一群であり、香川郡坂田廃寺、勝賀廃寺など、東讃の中でも比較的中讃に近い地域に多く分布する。これらは中房も縮小化しており、讃岐の川原寺式の中ではやや遅れると推測する。いちおう7世紀末頃としておく。石井廃寺の重圏文縁複弁八弁蓮華文は、文様構成からみる限りでは、それよりやや古そうである。

東讃地域で寺院造営が本格化するのには、川原寺式が細弁化した特徴的な細弁系の軒丸瓦や、藤原宮式軒瓦を中心とした時期である。細弁系瓦については、中讃地域的那珂郡弘安寺が初現とされ、弁端が尖り素弁化したものは藤原宮式軒平瓦とセットとなり中讃地域に分布するが、より原型に忠実な個体は、弘安寺から寒川郡極楽寺へと範が移動し、そこから上高岡廃寺、始





図6 西讃地域における古代寺院・瓦出土遺跡および関連諸遺跡 (1:150,000)

覚寺、宝寿寺、文様が崩れたものは山下廃寺、高野廃寺と、東讃地域に広く展開する。ちなみにこの瓦はさらに広域展開し、三宅廃寺など但馬を経て、播磨・丹波・丹後へも分布するとされる（前岡 2007）。藤原宮式軒瓦については、三野郡宗吉瓦窯での焼成が著名であるが、讃岐国内においては、後述する中讃地域における下外区鋸齒文をもたない偏行唐草文軒平瓦の一群を除き、東讃地域の諸寺に多く分布していることは、すでに先学諸氏により言及されている。願興寺跡の軒平瓦は藤原宮 6647E と同範であり、石井廃寺や長楽寺跡の軒丸瓦は、藤原宮 6278C・E と酷似しており、この地域からも藤原宮に瓦を供給した可能性も指摘されている（山崎 1995）。その他白鳥廃寺、下り松廃寺、始覚寺跡、宝寿寺跡、山下廃寺、高野廃寺、勝賀廃寺、百相廃寺と、東讃地域のほとんどの寺院で、創建瓦または修造瓦として藤原宮式が採用されている。いずれも 7 世紀末か 8 世紀初頭～8 世紀前葉頃のものとしてよからう。また、これも後述するが、川原寺式軒丸瓦が細弁化し弁数を減らしたものが、極楽寺跡、上高岡廃寺で出土しており、これらは東讃では重弧文軒平瓦と組み合わせるが、祖型となる中讃地域において、藤原宮式偏行唐草文軒平瓦とのセット関係が指摘されている。時期的にはおおむね 7 世紀末頃を下限とできるが、その根拠については中讃の項で詳述する。

8 世紀前半～中葉以降の瓦としては、白鳥廃寺、下り松廃寺、始覚寺跡、山下廃寺で均整唐草文軒平瓦などが確認されており、伽藍の大規模整備（白鳥廃寺）や補修に伴うものであろう。また中讃の阿野郡から東讃地域にかけては、国分尼寺式の細弁蓮華文系瓦が多くみられるのも特徴である。

以上みてきたように、東讃地域の諸寺においては、素弁蓮華文や川原寺式など、7 世紀後半～末頃の瓦を創建瓦とする一群（白鳥廃寺、下り松廃寺、石井廃寺、願興寺跡、宝寿寺跡、下司廃寺、坂田廃寺、勝賀廃寺）と、それよりやや遅れて 7 世紀末～8 世紀前葉頃に、弘安寺系の細弁系瓦や藤原宮式の瓦などをもちいて創建された一群（上高岡廃寺、長楽寺跡、始覚寺跡、山下廃寺、高野廃寺、百相廃寺）があるが、いずれも選地傾向は大きく異ならず、南海道に隣接した平野部に造営された下り松廃寺を除いては、丘陵端部や台地などから広く平野部を見通すことができる、眺望型の選地をとる寺院が多くを占める（極楽寺跡、願興寺跡、上高岡廃寺、長楽寺跡、始覚寺跡、宝寿寺跡、山下廃寺、高野廃寺、勝賀廃寺）。極楽寺跡や高野廃寺は南海道にも隣接するが、官道沿いに伸びてくる丘陵上に位置しており、眺望型の要素も併せもつ。その一方で、山裾や小盆地内、丘陵内部などに造営され、視線を制限する山林型、聖域型などのタイプの寺院も存在する（白鳥廃寺、石井廃寺、下司廃寺、坂田廃寺）。

それとは逆に、高松平野を北流する諸河川への意識は希薄であり、とくに香東川は、川合の地に田村神社が造営されるなど、河川交通路等として重視されていたと考えられるが、その流域に寺院はほとんど造営されていない。

東讃地域の寺院選地の特徴としては、官道隣接寺院のすくなさも相俟って、交通路沿いを中心とした、人々が参集する宗教的拠点というよりむしろ、平野部から仰ぎ見る、平野部を眼下

に広く見渡すような権威の象徴としてのモニュメント的な意識や、山林信仰や古墳の集中地帯等、それまでの在地的信仰と結びつく形で、寺院が導入され展開していったものと考えられる。

### 中讃・西讃地域

この地域では阿野郡の開法寺跡および三野郡の妙音寺跡が、出土瓦の年代観からは7世紀中葉～第3四半期と、もっとも古く造営が開始された寺院とみることができる。開法寺跡は綾氏の本拠地近くに造営されたとされ、またその後隣接して讃岐国府もおかれる、讃岐の政治的中枢である。地方においてこの時期最初に造営される寺院については、畿内における7世紀前半代の寺院造営に倣い、造営氏族の本拠地・居宅に近接して造営される事例が多く、官道隣接型の立地をとる妙音寺も含めて、その範疇でとらえることができよう。

中讃地域ではその後、中讃一円に分布がみられる素縁の川原寺式や、多度郡を中心に分布する法隆寺式軒瓦などをもちいて寺院造営が進められる。この地域の寺院選地は、東讃地域と大きく異なり、山裾や台地上にはほとんど寺院が造営されず、平野部を横断する南海道沿いを中心とした、沖積低地上に多く展開するという顕著な特徴がみられる(宝幢寺跡・田村廃寺・仲村廃寺・善通寺跡)。その一方で、南海道からほど遠く、土器川の丘陵部から平野部への流出点の河川沿いを選地する弘安寺跡では、川原寺式を独自に変形させた細弁蓮華文軒丸瓦を創出するが、その一部の系列は仲村廃寺など中讃地域に残るものの、よりオリジナルに近い系列は、極楽寺跡など東讃地域に広く波及していく。西三河地域の北野廃寺式が矢作川沿いに分布域をもつと同様、寺院造営において、瓦当文様や瓦工人の系譜と、寺院選地上の特徴は、ある程度一致して動くように思われる。その背景としては、瓦工人を管掌する在地有力者または勧進僧等の寺院認知が反映されたものとも考えられよう。

西讃地域においては、妙音寺で採用された高句麗様式の系譜を引く軒丸瓦が、後出諸寺にも主として採用されていく。その選地傾向は東讃・中讃地域ほど顕著な均質性はみられないものの、山裾(高屋廃寺)や丘陵斜面(道音寺跡・大興寺跡)などを指向する、東讃地域に近い選地事例が比較的に目立つ。

7世紀末～8世紀前半頃には、中讃地域でも東讃地域と同様、藤原宮式の偏行唐草文軒平瓦が広く分布するようになるが、下外区に鋸歯文を施さない文様の瓦を、先述の細弁蓮華文系列の軒丸瓦とセットとして使用する事例が多い(鴨廃寺・醍醐寺跡・仲村廃寺・善通寺跡)など、東讃地域とは異なる特徴をもつ。平城宮式の段階においても、中讃・西讃地域では外区鋸歯文をもつ均整唐草文の軒平瓦が共有されており、東讃地域も含めて、時期ごとにやや括りは異なるものの、郡を越えたある程度の地域的纏まりをもちつつ、各時期の瓦が展開している様子がみてとれる。



表1 讃岐地域の寺院立地と出土瓦

遺跡名	旧郡	所在地	地形	伽藍	出土			
					素弁・単弁系	川原寺式	細弁系	藤原宮式 偏行唐草
白鳥廃寺	大内	東かがわ市白鳥町湊	丘陵裾	法起寺式	?			○
下り松廃寺	寒川	さぬき市大川町下り松	沖積低地	不明	○			
極楽寺跡	寒川	さぬき市寒川町石田東	台地	四天王寺式・仏像			○	変形
石井廃寺	寒川	さぬき市寒川町石井	山地	心礎		重圈縁		○
願興寺跡	寒川	さぬき市造田	山麓	礎石		素縁		○
上高岡廃寺	三木	木田郡三木町上高岡	台地	礎石			○	
長楽寺廃寺	三木	木田郡三木町氷上	丘陵	不明				○
始覚寺跡	三木	木田郡三木町井上	丘陵	法隆寺式			○	○
宝寿寺跡	山田	高松市前田東町	丘陵端部	土壇・礎石	○		○	?
山下廃寺	山田	高松市高松町	丘陵	礎石			○	○
下司廃寺	山田	高松市東植田町	段丘	土壇・礎石・埴仏		○		
高野廃寺	山田	高松市川島本町	丘陵端部	礎石			○	○
坂田廃寺	香川	高松市西春日町	山麓・谷筋奥	礎石・仏像		*文縁		
勝賀廃寺	香川	高松市香西西町	丘陵裾・傾斜地	礎石		○		○
百相廃寺	香川	高松市仏生山町	沖積低地	礎石				○
田村神宮寺	香川	高松市一宮町	平地	不明				
開法寺跡	阿野	坂出市府中町	丘陵裾	法起寺式・仏像	○	*文縁		鋸歯なし
鴨廃寺	阿野	坂出市加茂町	山麓	心礎		*文縁		鋸歯なし
醍醐寺跡	阿野	坂出市西庄町	山麓・氾濫原	塔土壇・礎石		素縁		
讃岐国分寺	阿野	高松市国分寺町	台地	国分寺式				
讃岐国分尼寺	阿野	高松市国分寺町	丘陵	礎石				
法勲寺跡	鵜足	丸亀市飯山町	沖積低地	法隆寺式	複線鋸歯	素縁		
宝幢寺跡	那珂	丸亀市郡家町	沖積低地	法隆寺式?・心礎				軒丸のみ
田村廃寺	那珂	丸亀市田村町	沖積低地	心礎		素縁	○	鋸歯なし
弘安寺跡	那珂	仲多度郡まんのう町	沖積低地	礎石・心礎		○ →	○	
仲村廃寺	多度	善通寺市富士見町	沖積低地	礎石		○・法隆寺式	○	鋸歯なし
善通寺跡	多度	善通寺市善通寺町	沖積低地	四天王寺式・心礎		○・法隆寺式	○	鋸歯なし
道音寺跡	三野	三豊市豊中町	丘陵端部	礎石		○・法隆寺式		
妙音寺跡	三野	三豊市豊中町	丘陵端部	不明	○・山田寺式	素縁		
高屋廃寺	刈田	観音寺市高屋町	丘陵裾・傾斜地	礎石	○			
大興寺跡	刈田	三豊市山本町	丘陵	不明	○			
紀伊廃寺	刈田	観音寺市大野原町	沖積低地	不明	○			

瓦			諸地形・諸施設との関係 (◎：隣接 ○：近接)							類型
平城宮式	国分寺系	平安期	古道	河川・湖沼	山地	他寺院	官衙	前・中期中古墳	群集墳	
○		○		○	○					聖域
○	尼寺		◎							官道隣接
		○	◎						○	官道隣接・眺望
○		○			◎			○	○	山林・聖域
		○			○					眺望・聖域
					○			○		眺望
					○					眺望
上外区鋸歯	尼寺				○					眺望
					○				○	眺望
下外区鋸歯					○				○	眺望
		○			○			○	○	聖域
	尼寺	○	◎					○		官道隣接・駅家関連?
		○		○	◎			○	○	聖域・水運
		○			○					眺望・水運
		○			○			○		集落近接? 神宮寺関連?
	?		◎	◎						官道隣接・河川。神宮寺
	尼寺	○	◎	○	○		◎	○		官衙隣接・官道隣接
		○			○				○	眺望
		○		◎	○					水運
	○	○	◎			◎				官道隣接
	○	○	○			◎				眺望・官道隣接
	尼寺	○	○	○	遠望					官道隣接・聖域?
	○	○	◎				◎?			官道隣接・官衙隣接?
		○								集落近接?
外区鋸歯				○					○	水運
		○	○			◎				官道隣接
外区鋸歯		○	◎			◎		○		官道隣接
外区鋸歯		○	○							官道隣接・眺望
外区鋸歯		○	◎		○				○	官道隣接・眺望
外区鋸歯		○			○				○	眺望・聖域
		○			○			○		眺望
		○	◎							官道隣接・駅家関連?

## おわりに

以上、讃岐地域における寺院の動向について、選地傾向および瓦当文様から概観してきた。先にも述べてきたとおり、東讃・中讃・西讃という、地勢的纏まりをもつ区分ごとに、寺院選地の傾向が異なり、また瓦の分布もある程度それに対応している点は、きわめて興味深い。

その一方で、讃岐全体に敷衍できる特徴も存在する。讃岐はその面積の割には全国でも寺院数の多い地域であるが、ひとつの郡内に複数の寺院が相次いで造営されており、一郡一寺の様相はとらない。その寺院は地理的に近接するものを中心に、多くが瓦当文様の共有関係で結ばれるが、その割に、複数寺院が隣接して造営される例は少なく、郡内各所に散在する様子が見受けられる。複数寺院の隣接については、僧寺と尼寺などの役割分担である可能性が指摘されるが(小笠原 2007ほか)、讃岐の場合は、そのような役割分担的なものとは異なる理由で多くの寺院が造営されたのであろう。

他地域では頻繁にみられる河川型の寺院が少ないのも讃岐の特徴であろう。その背景としては、降雨量の関係で河川の流量が少なく、交通路としての河川の重要性が他地域に比して高くなかったことも考えられよう。

また、法興寺跡が神奈備である飯山を寺院の真北に遠望する選地であることは先に述べたが、讃岐地域には地勢的に、飯山のほかにも神奈備としてよいような円錐形の独立峰は数多く存在するものの、それらの山麓や、また遙拝するような選地の寺院は、管見の限り他にみられない。法興寺跡の所在する鶴足郡は、法興寺跡の他に寺院跡が確認されていない点も含めて、郡レベル、ひいては国レベルでの寺院と在地信仰の関係は興味深く、今後の課題である。

最後に、多くの古代寺院集中地域においては、7世紀創建の寺院の多くが、奈良時代以降の補修瓦をもたないのに比して、讃岐の場合は、ほとんどの寺院において平安期の瓦が確認されている。讃岐において他地域に比して多くの寺院が法灯を保っていたのか、それとも平安後期まで続く造瓦系譜の中で、瓦葺で補修・再建される割合が他地域と比して多かったのか、評価は後図を期したい。

このように、寺院を選地という着眼点から広域に分析することで、さまざまな視座が広がってくる。従来は寺院ひとつひとつを、特定の造営氏族等と結びつけつつ解釈していく研究が主流であったが、今後は寺院を地理的纏まりをもった寺院群として、地域としての寺院認知や諸事情および、それに基づく広域的な造寺計画等を考えていく必要があるだろう。

本稿は名古屋大学日本史学研究室での羽賀祥二先生・古尾谷知浩先生の開講授業における、讃岐地域での現地踏査に同行させていただくことで、その創意を得た。両先生および受講学生の皆さんに心より御礼申し上げます。



## 注

- 1 野々市市ふるさと歴史館展示より。
- 2 三重県埋蔵文化財センター 穂積裕昌氏のご教示による。

## 主要参考文献

- 安藤文良 1987 「歴史時代・古瓦」『香川県史第13巻 資料編考古』香川県
- 安藤文良 1988 「古代寺院」『香川県史第1巻 通史編』香川県
- 小笠原好彦 2007 「同範軒瓦からみた古代の僧寺と尼寺」『考古学論究—小笠原好彦先生退任記念論集—』
- 梶原義実 2011 「古代寺院の選地に関する考察—近江地域を題材として—」『考古学雑誌』95-4
- 川畑 聡 1996 『讃岐の古瓦展』高松市歴史資料館
- 小林裕季 2015 「みはまとわかさの山寺Ⅱ」『平成27年度美浜町歴史フォーラム 再論若狭の古代寺院』美浜町教育委員会
- 坪之内徹 1982 「畿内周辺地域の藤原宮式軒瓦」『考古学雑誌』68-1
- 蓮本和博 1993 「讃岐における白鳳寺院出土瓦の研究—川原寺式軒丸瓦の系譜の作成を通して—」『香川県自然科学館研究報告』15
- 花谷 浩 1993 「寺の瓦作りと宮の瓦作り」『考古学研究』40-2
- 前岡孝彰 2007 「但馬の古代寺院とその軒瓦」『考古学論究—小笠原好彦先生退任記念論集—』
- 山崎信二 1995 「藤原宮造瓦と藤原宮の時期の各地の造瓦」『文化財論叢』Ⅱ 奈良国立文化財研究所

## 図版出典

図1・3・6：筆者作図      図5：筆者撮影      図2・4：(川畑 1996) より

キーワード：古代寺院、選地、瓦、讃岐地域

**Abstract**

## Location Select of the Ancient Temple in the Sanuki Province

Yoshimitsu Kajiwara

As a background of a marked increase of the temple of the latter half of the 7th century, various reasons have been raised until now, being as a monument replaced with an ancient tomb, military objective and an economical situation. I have so far performed indication that the erection background of an ancient temple can be approached by examining in what kind of place was chosen, and the ancient temple meant what kind of how to show.

In this paper, examination synthetic about the location of an ancient temple, circumference environment, an excavation roof-tile, etc. was performed on the topic of the Sanuki province.

As a result, it was shown clearly that a big difference is found by the location of a temple also in the Sanuki area. In the eastern area, temple whereas was built in a good location with a panoramic view of the hills, in the central area, there was a difference that was built in a location adjacent to the low-lying part of the road and the government office.

On the other hand, there was a common point throughout the Sanuki region that a plurality of temple in each county was built without adjacent respectively, that the pattern of roof-tile same as the tendency of the location to correspond, that many temples was repaired with tiles even after the Heian Period.

Keywords: Ancient temple, Location, Roof-tile, Sanuki province